

---

# つまり真ん中で良くね？

瀬見尾津凪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

つまり真ん中で良くな?

### 【著者名】

Z8363S

瀬見尾津凪

### 【あらすじ】

「男で女な神の使者」の番外編SS集。ぶっちゃけ、本編とまったく関係ないです。作者の自己満足および妄想です。本編よりも若干描写が過激で、一部BL色が強くなっています（ソールハロッショウ×マリアド）。閲覧の際にはご注意下さいませ。

「EJの世界では、人間みんなが両性具有なわけだけど、子どもってどうやって作るんだ？」

「は？ 交尾するに決まってるじゃない」

と、返すネネルにマリアドが思わず突っ込む。

「おい、セックスって言え」

ネネルは構わずに説明を始めた。

「基本的に子どもを産むのは女の役目ね。でも、中には同性同士で

結婚する人たちもいるから、様々だわ」

「ふうん……で、そのセックスはどうやって？」

「……恥ずかしいこと聞くのね、あんたつて」

「セックスを交尾って言っちゃうお前に言われたくないな」

ネネルは口を閉じ、マリアドをじっと睨んだ。

そこへやって来たのは宫廷魔術士ソールハロッショ。

「そんなところで、何を話しているんだい？」

「げ、一番会いたくない奴に会った」

「……マリアド、お願いだからオレのこと、もう少し信用してくれないかな？」

「嫌だ」

苦笑いを浮かべるソールハロッショを見て、ネネルがぱっとひらめいた。

「マリアドがね、セックスについて知りたいんですって。実践付きで教えてあげたら？」

「な、なんてことを……」

手を丸くしながらも、ソールハロッショの手はマリアドへと伸びている。

「あ、ちょ、いや、実践はいらない。つか、その汚い手をじけろ」「恥ずかしがらなくて良いんだよ、マリアド。さあ、オレの部屋で

じっくり

」

と、腰を抱かれたところでマリアドの拳が彼の腹に入る。

「悪いな、別の人間に聞くわ」

「……マリアド、それを私が教えるのか？」

「うん、口で良いから」

「……そう言われても」

と、視線を泳がせるヴェルシ。

マリアドは周囲に誰もいないのを確認してから、また彼女へ目を向けた。

「で？」

「そ、その、普通にやるぞ。本当にそのまま、普通に」

「普通じゃ分からねえよ」

「つ、だ、だから……」

ヴェルシが顔を赤らめだした。どうやら恥ずかしがっている様子だ。

「し、処女にそんなこと聞くくなつ！」

と、その場から走つて逃走するヴェルシ。

「……ぶつちやけたな、ヴェルシ」

その背中を見送つて、マリアドは今度こそ教えてくれそうな人の元へ向かう。

「簡単ですか。男の×××を女の×××に挿入するだけですもの」「やっぱりそうですか」

と、納得した様子のマリアド。

フィアンシーナ姫は何を思つたか、さらに付け加えた。

「男同士では、基本的に受が子どもを孕みますわね。女同士では、両方子どもを産むこともあるそうですわ」

「そろそろ、それが聞きたかったんですよ！」

「納得してもらえて良かつたですわ。ちなみに、女同士ですと挿入

してもあまり気持ちよくありませんのよ。それなのに男同士では激しいセックスだって出来ちゃいます。不公平だと思いません？」

「あー、それは確かに不公平かも」

「でしょう？ まあ、マリアドな「ひじりもこけ」そうですねビ」と、マリアドの身体をじろじろと見やるフィアンシーナ。

「……試してみます？」

「冗談でマリアドが言つてみると、彼女はすぱつと答えた。「「じめんなさい」。フィアンシーナは自分でやるより、見ている方が好きなのですわ」

爆弾発言だ。本編では絶対に見せられない一面である。

「……それはいわゆる、視姦ですか？」

「うふふ、まあ、どうでしょう？」

意味深長に笑うフィアンシーナに、マリアドはただ苦い顔を浮かべるだけだった。

「……」

先ほどから、何やらソールハロッショウがマリアドを見つめていた。それも、マリアドの脣の辺りを。

「……妙なこと考えてるだろ、ソル」

と、マリアドが耐えかねて口を開くと、ソールハロッショウはまつとする。

「いや、別に……ただ、あんな奴に先を越されるとは思ってなくてね

「……あつそ」

と、呆れるマリアド。

ソールハロッショウは少し考える様子を見せてから、そっと距離を縮めた。

「……離れるよ」

と、端へ寄るマリアド。

「嫌だと言つたら?」

「それはこいつの台詞だ」

向かいではゼーシュとフューリーが見ていた。構わず距離を詰めるソールハロッショウ。

「どうせ、もうファーストキスは奪われたんだ。良いだろ?」

「嫌だ」

「どうして?」

問うソールハロッショウに、マリアドは相変わらず冷たい言葉を放つた。

「俺は変態は嫌いだ」

「……変態つて、そんな」

と、苦笑いを浮かべるソールハロッショウ。

仕方なく元の位置へ戻ったソールハロッショウだったが、その後

に馬車が揺れた。

その反動で彼の方へ倒れ込むマリアド。

「うわっ」

とつさにその身体を抱き留めたソールハロッショウは、にやりと笑つた。

「……ちよ、ま、やめ、やめろ！」

嫌な予感を感じて叫ぶマリアドだが、間もなくその唇はソールハロッショウに塞がれてしまう。

「よし、これでマリアドはオレのもの」と、喜ぶソールハロッショウだったが、ゼーシュが唐突に口を開く。「二ゲル、あの変態の口を封じて」

「きゅうー」

ぱふっとソールハロッショウに飛びかかる二ゲル。

「うわ、ちよ、やめる、何してるんだ、おま」

「きゅうー、あゅうあゅうー！」

ペロペロと唇を舐められて、ソールハロッショウの身体からだんだんと力が抜けていく。

一方、マリアドは唇に手を当てて呆然としているのだった。

・マリアド

「ちょっと聞きたいんだだけ」

と、マリアドはソールハロッショウに声をかけた。

「何だい？ 何でも答えてあげるよ」

何を期待しているのかにこだわっている彼の気持ちを無視し、マリアドは問う。

「俺のセ、この『マリアド』ってこの名前は、ビーいつ意味なんだ？」

「何だ、そういうことか」

ソールハロッショウはマリアドをまじまじと眺めてから言った。

「『可憐』って意味だよ」

「嘘教えるな」

何の根拠もないのに嘘だと決めつけるマリアド。

ソールハロッショウは仕方なく返した。

「分かったよ、本当は『清純』っていう

「もういい」

さつさと見切りをつけ、マリアドはソールハロッショウへ背を向けた。

「名前の意味、ねえ……」

と、考える様子でネネルは言った。

「そうね、言つなら『愛らしい人』ってことかしら

「はあ？ お前までそんなこと言つのかよ」

と、マリアドは反抗した。

「あら、あたしの他に誰が言つたの？」

「変態魔術士」

「ああ、なるほど」

と、納得するネネル。

「マリアドはもう一度尋ねた。

「で、意味は？」

「だから、『愛らしい人』よ。あながち間違つてないはずだけど？」

「からかうのはよせ」

「そしてさつと去つてしまつ。

ネネルは息をついた。

「間違えてないはずなのに」

「え、『マリアド』の意味ですか？」

「うん、ジャスナなら嘘言わないだらうと思つてた」と、期待の目を向けるマリアド。

しかしジャスナは悩み始めた。

「そうですね……うーん……意味、となると……」

ちらりとマリアドを見やつて、控えめに言つ。

「『美しい人』でしょうか」

「……本当に？」

「い、いえ……違つかもしれません」と、ジャスナ。

マリアドは溜め息をついた。

「やっぱ、名付け親に聞くのが良いかな」

「え、名付け親つてもしや……」

はつとするとジャスナへ、マリアドは申し訳ない顔をした。

「ああ、いや、神様じゃないんだ。俺に名前をくれたのは、フィアンシーナ姫なんだ」

「そうでしたか……初耳です」

仕方なく姫の部屋を訪ねたマリアド。

「え、意味ですか？」

「ええ、この名前にはどんな意味があるのか、ちよつと疑問に思い

まして

と、笑うマリアド。

フィアンシーナはすると、にっこり微笑んだ。

「特に意味なんて在りませんわ

「え？」

「『マリアド』は、フィアンシーナの作った創作ですもの」

マリアドは呆然とした。

「強いて意味を付けるなら……『純情可憐』、『愛らしい女性』ってところですね」

にっこり微笑む姫を前に、マリアドは乾いた笑いしか返せなかつた。

「ところで、お前は俺のこと、どう思つてる?」

「え? それは……えーと、そうですね」

何故だか悩み始めるメイド。さっさと答えるよ、と言いたかったがやめた。

「その、私はどちらかというと中性的な方が好みなので、マリアド様にはとても魅力を感じます。ですが、やはり実際に交際をするとなると話は違つてしま……」

「で、つまり?」

「つまり……その、マリアド様はどうも受け身のよつですでの、同じく受け身の私としては、相性が合わないかと」

あれだ、フューリーはやはり抱かれたいタイプなわけだ。誰かに抱かれたいのだから、俺では駄目というわけ。

「あと、それに加えてマリアド様には」「

と、何か言いかけてはつとするフューリー。

「何だよ?」

反射的に尋ねたら、彼は俺の顔色を伺つてこうにして言った。

「その……マリアド様には、ソールハロッショ様がいらっしゃるわけですから、邪魔をするわけにもいかないと思いまして」

「……ああ」

考えて、思わず鼻で笑つてしまつた。

「ねーよ、絶対にそれはねえ。むしろ俺から気を逸らして欲しいぐらいだ」

フューリーがぽかんと口を開けて俺を見ていた。

「で、ですがマリアド様は……」

「ただの玩具だよ、あんなん。分かりやすく俺に惚れてるから遊んでやつてるだけだ」

と、にっこり微笑む。

するとフューリーは、そのまま吐き付けをして部屋から出て行った。  
しまった。

## II その2

「ところで、お前は俺の「こと、どう御ひてる?」

「え? それは……えーと、ううすですね」

何故だか悩み始めるメイド。うつと答えるよ、と言ったかった

がやめた。

「その、私はどちらかというと中性的な方が好みなので、マリアド様にはとても魅力を感じます。ですが、やはり実際に交際をするとなると話は違つてきます……」

「で、つまり?」

「つまり……その、マリアド様はどうも受け身のようですので、同じく受け身の私としては、相性が合わないかと」

あれば、フューリーはやはり抱かれたいタイプなわけだ。誰かに抱かれたいのだから、俺では駄目というわけ。

「あと、それに加えてマリアド様には」「  
と、何か言いかけてはつとするフューリー。

「何だよ?」

反射的に尋ねたら、彼は俺の顔色を伺うよつこにして言った。

「その……マリアド様には、ソールハロッショウ様がいらっしゃるわけですから、邪魔をするわけにもいかないと思いまして」「

「……な、何言つてるんだよ!」

思わず恥ずかしくなつて顔を逸らす。

「別に、俺はあいつのことなんてどうとも」「

「お言葉ですが、それがいけないので。マリアド様はまつと素直になられた方が可愛いんですから」「

「つ……！」

何でだ、何でフュエリには分かってしまうんだ！？  
恥ずかしさに耐えきれず、俺はベッドへダイブした。

「もういいっ、出でけ！」

フュエリはくすくす笑うと、片付けをわざと終えて部屋を出て  
行つた。

## キャラクター設定まとめ（前書き）

本編で設定を活かせなかつたため、このひきまとめをせんじただきます。

飽くまでも参考程度に留めて下さー。

## キャラクター設定まとめ

<メインキャラクター>

マリアド

18歳（見た目）170cm神の使者

ネネル

20歳148cm宫廷魔女

ヴェルシ

20歳172cm女騎士

ゼーシュ

15歳158cm騎士見習い

ソールハロッショ

22歳180cm宫廷魔術士で公爵

フュエリ

19歳174cmメイド

ジャスナ

16歳160cm巫女

フィアンシーナ

17歳156cm姫

ルアンザ

15歳156cm双子姉で兄

ユヴァイン

21歳178cm黒幕の黒妖精

＜その他＞

セリン 21歳

＜おそらく非公式カツプリング＞

ソールハロッショ × マリアド  
ネネル × マリアド  
ソールハロッショ × フュエリ  
マリアド × ゼー シュ  
ヴェルシ × ジャスナ  
ルアンザ × ジャスナ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8363s/>

---

つまり真ん中で良くね？

2011年8月7日03時16分発行